

研究論文

特別支援教育の理念を基盤とし 生きる力を育成する学校（2）

—南アフリカ共和国ムプマランガ州 A 中等学校の調査から—

谷 山 優 子

1 本研究の主題

（1）研究の背景・動機

筆者は、特別支援教育の切り口で、多くの学校現場に入り込みながら研究調査をし、子供や教員に関わってきた。どの学校も、子供が社会に適応できるよう知識、理解、思考力、判断力の育成を目標に教育をおこなってはいる。しかし、より特別支援教育の理念を意識した視点をもって、目の前の一人一人の子供（障害のある子供はもとより、安全な生育環境〔貧困を含む〕が保障されていない子供、不登校やその傾向のある子供、外国にルーツのある子供、LGBT〔性的少数者：セクシャルマイノリティ〕の子供、ヤングケアラーなど教育的に弱い立場にある子供）を大切にし、その子供が生きていく力を育み、生きていける社会を構築する取り組みが求められると強く考えるようになった。そのような中で、関心が次第に焦点化され、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校をどのようにして創っていくことができるのかということを明らかにしようと考えたことが研究の動機である。

これからの社会で生きていく子供たちに対して教員はどのような不安を持っていて、どのような力を育成したいのかについてアンケート調査（教員262人、2019年10～11月調査）を実施した。その結果、教員が日々子供に向き合いながら、育成したいと考えている力は、わが国や国際社会が求めている資質・能力や生きる力であるが、特別支援教育の理念を基盤に置いて考えていることが明らかになった（谷山、2020）。つまり、国際社会で活躍できるような資質・能力や情報活用能力もこれからの社会で生きていくために求められるとしながらも、子供一人一人の特性や家庭的な背景、支援ニーズに注目して、自分らしく生きていく力も同様に意識して育成したいと考えていることが確認できた。教員は、これからは、予測困難な社会に移行していくことを鑑み、子供自身に自立して生きる力を育成しつつ、助け合い、協働で課題を解決していく共生社会を創っていく一員として育成したいと意識していた。このような学校現場の意識が、本研究の背景にある。

（2）本研究の目的・方法

本研究は、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校を創る要件について明らかにすることを目的とする。本稿では、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する海外の学校の事例から考究する。子供を取り巻く社会的な環境の状況を重視しながら、特別支援教育の理念を独自の方法（教員が子供を理解し、家庭や地域が子供を理解し、子供たちが子供たちを理解するという環境

づくり）で遂行し、子供たちに生きる力を育成しようとする学校にはどのような要件が見られるのかを明らかにする。

方法としては、わが国や海外での特別支援教育の理念を基盤として育成する生きる力や学校教育のあり方について先行研究にあたる。次に、先行研究を基にした事例研究として、南アフリカ共和国（Republic of South Africa）のムプマランガ（Mpumalanga）州の教育事務所や学校への訪問調査をおこなう。教員らにインタビューをしたり、生徒へのアンケート調査を実施するなどして多面的にとらえる。南アフリカ共和国は、これからの社会を生きる子供に求められる生きる力についての枠組みを検討している OECD 加盟国ではないが、格差のある教育環境のなかで学力向上や生きる力の育成に取り組んでいることから選定した。この事例から、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校の要件を導き出す。最後に、本研究の成果と課題について考察する。

なお、倫理的配慮については、神戸女子大学研究倫理委員会の承認を得ている【2019-7-1】。

2 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校

（1）特別支援教育で育成したい生きる力

特別支援教育については、障害のある子供の教育ととらえることに限定せず、一人一人の子供の学びを保障するすべての子供に資する教育であるとおさえる。また、これからの社会を生きる子供に求められる力として、子供に必要な資質・能力が多様にあげられてきたが、特別支援教育の理念に基づき、より一人一人の子供の生きていくための力としておさえる。

筆者は、ガードナー（Gardner,H.）が提唱した M.I.（多重知能：Multiple Intelligences）の概念は、子供の多様な能力を伸ばす枠組みとして、これからの社会を生きる子供たちに育成していくべき生きる力であると捉えてきた。障害のある人のスポーツやダンス、アート、音楽など8つの能力は、2021年8月に開催された東京パラリンピックやその開閉式でも、障害のある人々の多様な生きる力の体现として世界中が注目したところである。

わが国の学校現場では、特別支援教育のスタート（2007年4月）以降、障害や認知特性に合わせた指導方法について研究が盛んにおこなわれてきた。

例えば、算数障害や書字障害、ワーキングメモリ、音韻指導など子供の認知特性に特化した学習指導の方法についての実践的な研究がある^{（1）}。

学習障害（LD：Learning Disabilities）の研究は、殊に多い。中でも、竹田（2015）の学習障害の当事者研究は、気づかれにくい学習障害のある子供の認知特性に気づいて早期に支援を開始することが、大人になって自信をもって生きていく力に大きく関わるということを明らかにした。

また、脳からくる認知特性のため、学校生活においても他者とのコミュニケーションが円滑にいかない、他者の考えを推測することに困難があるという子供への指導として、様々なソーシャルスキルトレーニングの開発研究がおこなわれてきた。そのベースに、ノースカロライナ（North Carolina）州で自閉症の人とその家族のために幼少期からおこなわれてきた TEACCH プログラム（Treatment and Education of Autistic and related Communication-handicapped Children）の考え方（佐々木、

2008) などがある。この研究は、自閉症の子供の療育や成人の生活・就労支援に成果をあげてきた。自閉症の人は発達が遅れていたり劣っていたりするのではないという基本的なスタンスから、彼らが本来もっている優れたものに着目し、より発揮できるように支援をするものである。

このような特別支援教育の考え方は、障害の有無に関わらず、人間関係を円滑にするふるまい方のトレーニングとして学級全体で取り組む実践的な研究に発展している。諸富(2000)は、エンカウンター的手法を用いて新たな授業づくりを開発した。エンカウンターは、自分はどうか、他者はどうかありたいのかをロールプレイ等で理解していく手法である。他者と自分は考えやふるまいが違って当たり前であるし、違っているからこそ楽しい、面白いと実感させることができる。学級づくりや全校あげた学校風土づくりに活用したり、子供一人一人の特性を理解する特別支援教育の視点や差別、人権侵害のない社会をめざす人権教育の視点からも活用できる。長山・勝二(2018)は、対人関係形成が困難で、通常の学級で孤立していた ADHD (Attention-Deficit / Hyperactivity Disorder) の小学5年生女児を対象に、通常の学級でのエンカウンターを用いて対人関係支援を実施したところ、学級の雰囲気や友達関係の評価が高まり、学習意欲の向上にも寄与するなどの波及効果を生むことが示唆されたとしている。

特別支援教育の理念から派生した学習方略や生活改善の研究の広まりは、不登校やひきこもりといった子供の生き方に関わる大きな教育課題にも迫るアプローチとなりつつある。子供の学習上、生活上の困難さに対して、学校現場は、通級指導や特別支援学級など多様な学びの場を設定したり、指導プログラムを工夫するなどして支援に取り組んでいる。

また、自尊感情が低下している子供に夢や希望をもって社会参画する力を育成するキャリア教育も、特別支援教育の理念を基盤とした生きる力の育成につながると考える。沼津市立原東小学校は、「社会との関わりの中で自分らしく生きる力を育てる」をテーマに3年間の実践研究をおこなった(浅野・伊藤, 2009)。小学校のキャリア教育の研究の中で、めざす資質・能力「人間関係形成能力」を土台とし、その上に「情報活用能力」、「将来設計能力」、「意思決定能力」を築いていくとするモデルを掲げ、将来を見通し、夢や希望を持ちつつ自分らしく生きることや自分ができることなどを深く広く考えさせるといふ、特別支援教育の理念に通底する教育実践をおこない、今もその実践は引き継がれている。

このような事例の研究は多く見られるが、いずれも、特別支援教育の理念を基盤に置いて取り組む教育実践が、子供がこれからの社会を生きていく際に必要な力の育成につながっていると考ええる。

子供が、他者の個性や能力の違いを認識しながら、様々な人々と共に活躍できるような社会(共生社会⁽²⁾)を形成して生きていく力を特別支援教育の理念を基盤として生きる力を育成する学校を創っていくことが求められると先行研究から考究した。

(2) 21 世紀型スキル等で求められる生きる力の育成

21 世紀を生きる次世代の子供たちに求められる生きる力には、いくつかのモデルが開発されている。その背景としては、知識基盤社会から市場経済や社会民主主義への移行などが指摘されている(石井, 2015)。いかに知識を創造し、知識を活用するかが成功のカギを握り、知識を核とした熾烈な競

争がグローバルに展開するグローバル知識経済 (global knowledge economy) の時代が到来したと菅原 (2002) は述べているが、学校現場でいえば、教科の知識・技能に加えて、教科横断的な汎用スキルも求められているということである。このような社会の変化に伴う経済界から教育界への要求は、先進諸国においても共通の教育課題であり、OECD 加盟国では、これからの社会を生きる子供たちにつける資質・能力（コンピテンシー）の枠組の開発に取り組んでいる（松尾 2015）。

黒田 (2015) は、開発された 21 世紀型スキルの資質・能力の枠組みを、DeSeCo (Definition and Selection of Competencies) プロジェクトが提案する「キー・コンピテンシー」ともう一つの「21 世紀スキルの定義と評価をめぐるプロジェクト (Assessment and Teaching of 21st Century Skills)」の大きな二つの流れがあるとして整理している。

ここにあがっている様々な資質・能力について、三宅ら (2014) は、「スキル一つ一つは目新しいものではないが、多様で変化し続ける問題解決を可能にし、多様で変化し続ける状況の中でいつでも新しい考えを試みることができるために一生涯で続けるスキルである (p.224)」と述べ、どの国の子供であっても、これからの社会を生きていくために求められる能力は、必要な時に活用でき、持続可能 (発展的に修正可能) な能力であるとしている。しかし、そもそも教育以外の企業がこれからの社会を見越して求める人材に必要としている能力を規定し、身につけさせようとしている感がある。西野 (2017) は、このことを教育の主たる目標にして、本当によいのだろうかと述べている。

それらの議論も踏まえたうえで、各国の教育改革の動向を反映したキー・コンピテンシーを基に、わが国の学習指導要領 (2017 年改訂) は、3 つの資質・能力の柱（「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間力」）が示されたと白井 (2020) は整理している。

スタンダードを明確化し、学力テストでその成果を検証したり、説明責任（アカウンタビリティ）を求めたりしながら学校教育の質の向上を図るというようなエビデンスに基づく教育改革 (standards-based reform) については、改めて教育の本質から問い直す動きも出ている（田中, 2012）。

キー・コンピテンシーを定義して 15 年が経過した。グローバル化が一層進む現在、OECD (2019) は、2030 年を目途にウェルビーイング (Well-being) を達成するためのコンピテンシーという目標を設定し、議論している。日本代表で OECD のまとめに参画した白井 (2020) は、「ウェルビーイングは、一般に良好な状態を意味する言葉である。例えば、(中略)『健やかさ・幸福度』と訳されているが、(中略) 個人だけでなく、社会としてのウェルビーイングの実現などより広い意味で用いられている (白井, 2020, p.58)」としている。社会としてのウェルビーイングは、単なる経済的・物質的な繁栄以上のものを含み、一人一人が描き、その実現に向けて取り組むものという普遍的価値を帯びていると捉えられる。

わが国では、1998 年に改訂された学習指導要領において、次世代を担う子供たちに変化する社会に対応する能力として身につけさせる力として「生きる力」という理念が示され、教育改革がスタートした (図 1)。

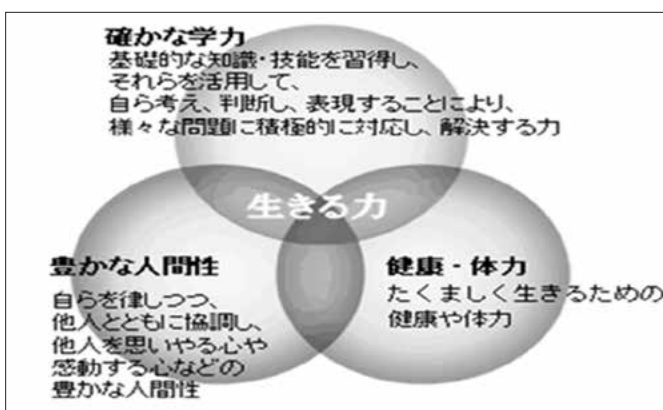


図1 中教審（2003）が求める資質・能力（文部科学省）

「生きる力」（中央教育審議会答申，2003）とは、1.基礎・基本を確実に身に付け、いかに社会が変化しようと、自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力、2.自らを律しつつ、他人と共に協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、3.たくましく生きるための健康や体力、の3つの資質・能力である（文部省，1996）。

一方、世界的な動向を受け、国立教育政策研究所（2009）も、人が生きるための鍵（キー）となる能力として、わが国の生涯学習政策の策定の参考と位置づけながら研究をおこなってきた（図2）。

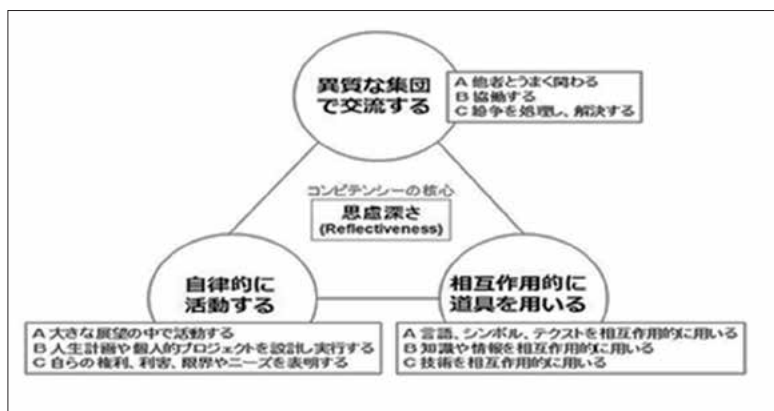


図2 3つのキー・コンピテンシーの構造
（国立教育政策研究所ホームページより）

2006年の教育基本法の改正では、知、徳、体の育成とともに、特に人間として生きる態度の育成が強調された。学校現場は、指導法の実践研究や教育方法の理論的考察、教育の実態の経年調査等に取り組んだ。それらの結果をふまえ、2020年度から小学校で、2021年度から中学校で全面実施された新学習指導要領（文部科学省，2019）では、先ほど述べた3つの資質・能力の柱が強調されている（図3）。

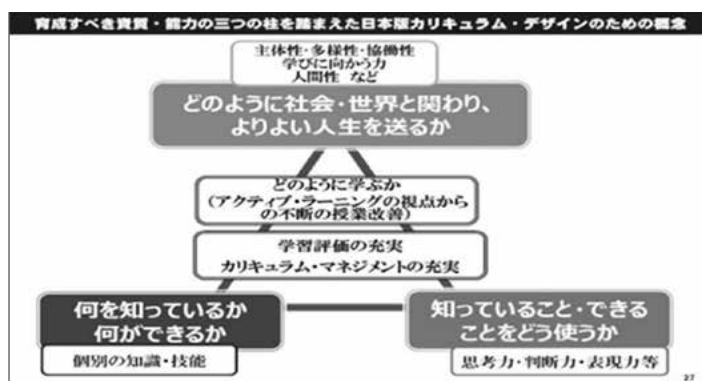


図3 現行学習指導要領のカリキュラム概念（文部科学省，2018）

これまでの知・徳・体にかかる「生きる力」の理念を、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう全ての教科等を①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理したのである。知識や技能の習得については、「何ができるようになるか」を明確にすることが重要であるとしている。社会で求められる資質・能力を子供に育み、生涯にわたって探究を深め、未来社会の担い手として、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」ということを身につけて送り出していくことがこれまで以上に求められる。そのため、「どのように学ぶか」という視点での授業改善が必要であるとした。

生きる力としての資質・能力については、国立教育政策研究所（2016）が中心となり、「資質・能力を育成する教育課程の在り方に関する研究」がなされている。西野（2017）は、子供の特性を資質・能力の育成に組み込むカリキュラムを批判し、子供の学びに現れる個々の特性を多様な方法で解釈すべきという問題提起をしている。石井（2017）も、資質・能力ベースの改革について、どのような社会でも対応できる「〇〇力」という目標を作り、教育・訓練しようとする傾向は学習活動の形式化・空洞化につながる危険性をはらむと指摘している。

こうした先行研究からも、生きる力をどの子供にも育成すべき資質・能力と一面的に捉えるのではなく、一人一人の子供が本来持っている資質・能力を引き出し、どの子供も自分の人生を生き生きと自分らしく生きていけるよう支援するという特別支援教育の理念を基盤に捉えていく必要があると考える。

（3）特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校

これからの社会を生きる次世代の子供に育成したい生きる力は、グローバル知識経済への移行に対応できる力であるという背景がある。これからの社会は、特定のスキルだけでなく、自分が持つ知識やスキル、態度、価値観などからその場面で必要なものを抽出し、その文脈に即して活用することが求められると白井は述べている（白井，2020）。

学校現場の教員らは、このような世界の動向や2008年（平成20年）改訂の学習指導要領で強調さ

れている知識や技能、学ぶ意欲や自分で課題を見つけ、自ら学び、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力を育成しようと実践的な研究をおこなってきた。

本研究では、特別教育の理念については、文部科学省の示す考えや研究者の提案、学校現場での取り組みなどからの考察を基に、「障害のある子供のみならず、安全な成育環境が保障されない子供、不登校やその傾向のある子供、外国にルーツがある子供、LGBT の子供などを含み、一人一人が自分らしさを発揮でき、卒業後も多様な人と共に生きていく力」と規定した。

また、これから求められる生きる力については、文部科学省の提案や OECD 等の提案、現職の教員に対する調査等からの考察を基に、「豊かで責任ある人生につなげ、現在や将来の課題に対応していく力、ウェルビーイングの実現につながる資質・能力」と規定した。

そして、この二つの規定を一体化した特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校については、述べてきた考察を基に、「主体的に自己の力を可能な限り発揮し、人と関わりながら、よりよく生きていこうとする力を育成」する学校であると規定した。

これら特別支援教育の理念と生きる力を一体化させた学校教育を、図4に示しておく。本研究が追究する特別支援教育の理念を「障害のある子供、安全な成育環境が保障されない子供、不登校、外国にルーツがある子供、LGBT など性的少数者など支援ニーズのある子供を根幹に置きながら、一人一人が自分らしさを発揮でき、卒業後も多様な人と共に生きていく力を培う」と規定し、図4の中央部の点線枠で示した。これから求められる生きる力については、「豊かで責任ある人生につなげ、現在や将来の課題に対応していく力、ウェルビーイングの実現につながる資質・能力」と規定し、図4の下部に点線枠で示した。そして、この二つの規定を一体化した特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校という本研究のおおもとになる考え方については「主体的に自己の力を可能な限り発揮し、人と関わりながら、よりよく生きていこうとする力を育成」する学校であると、図4の最下部に太枠で示した。

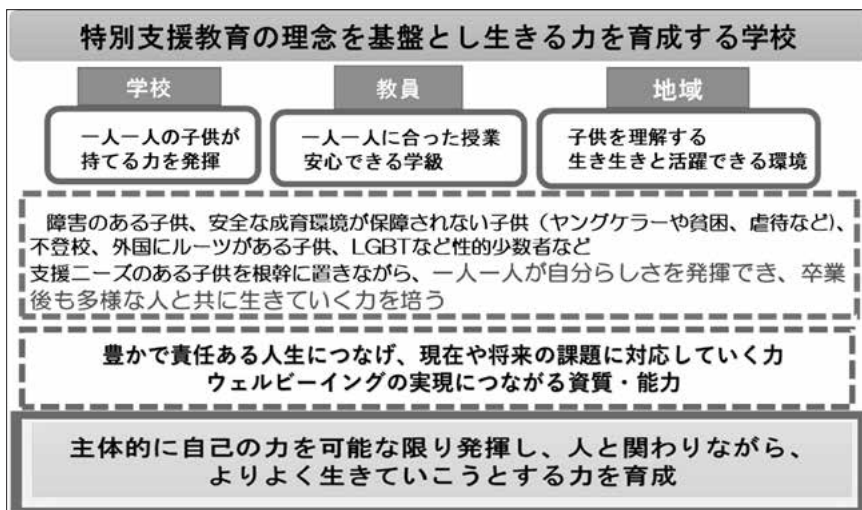


図4 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（2）

この図4の上部に示したように、学校、教員、地域が一体となりながら子供一人一人のニーズに合った支援をし、すべての子供が自己の力を発揮できる学習環境を創るのが特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校のあり方である。インクルーシブ教育の考え方も浸透しつつあり、特別支援教育の考え方を追究していくと誰もが自分らしさを認められる「共生社会」の構築に辿り着く。

社会的な立場の強い弱いにかかわらず、すべての人々が共に生きる社会を共生社会ととらえ、互いに助けたり助けられたりしながら、誰もが生きやすい社会を築き、自立して自分の持てる力を発揮し、よりよく生きていく力の育成が学校で確実におこなわれることが重要である。このような社会で生きていく力が子供に求められる生きる力であるということが確認できたと考える。

3 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校の探究

：南アフリカ共和国ムプマランガ州 A 中等学校（A Secondary School）

（1）調査の目的

本研究で重視する特別支援教育は、21 世紀型スキル等を牽引する OECD 加盟諸国においても重要な教育課題である。OECD 加盟国は、日本や欧米諸国を含む 38 か国（外務省，2021）である。アフリカ諸国は 1 か国も入っていない。南アフリカ共和国（Republic of South Africa: 以下、南アフリカ）は、服部（2002）によると、1994 年の第 3 回国際数学・理科教育調査（Third International Mathematics and Science Study, TIMSS）における南アフリカの中学 2 年生の得点が 354 点（正答率 24%）で参加 41 か国 / 地域の中で最下位であった。

ヨハネスブルグ日本人学校長の山本（2010）によると、南アフリカは、アパルトヘイト後、新憲法が施行されるのと同時に、学習指導要領（Curriculum 2005）や学習計画ガイドラインが示され、教師の能力育成や授業改善、教材教具の開発が推進されているとのことであった。さらに、南アフリカの北東部にあるムプマランガ（Mpumalanga）州において、理数科支援の研究調査が入り、日本の政府開発援助（ODA: Official Development Assistance）（1995 年）や広島大学と鳴門教育大学（1994 ～ 1998 年）の援助や研究がおこなわれており、JICA（国際協力機構 Japan International Cooperation Agency）がムプマランガ州において理数科教育の国際支援を 1994 年から行っている（村田，1998）。JICA のボランティア隊員の派遣は、2020 年 3 月末に新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による全隊員一時引き上げで中断まで継続している。

井ノ口（2008）が、南アフリカの 9 つの州別で生徒一人当たりの教育予算配分をまとめたものが表 1 である。

表 1 州別の生徒一人当たりの教育予算配分 (井ノ口, 2008, p.38 より抜粋)

(単位: 南アフリカランド)

	1994	1995	1999	2000	2003
東ケープ州	1036	1769	2404	3414	4870
自由州	n. a.	2447	2988	3873	5871
ハウテン州	3189	3098	3548	4896	5723
KZN州	2260	2105	3436	3109	4359
ムプマランガ州	1994	2001	2773	3486	4951
北西州	1182	1977	2682	3854	5498
北ケープ州	3125	3401	3660	4340	6455
リンボポ州	n. a.	1766	3188	3346	4545
西ケープ州	3980	3567	3362	4496	5532

(出所) South Africa Institute of Race Relations[1995-96, 2000, 2005]

黒人人口の多い東ケープ (Eastern Cape) 州、ムプマランガ (Mpumalanga) 州 [どちらもほとんどの住民が Zulu 族である]、北西 (North West) 州の予算配分は急激に改善され、白人子弟の多いハウテン (Gauteng) 州や西ケープ (Western Cape) 州と同程度配分されているとしつつも、依然として人種間・地域間において根強い格差が存在するとしている。このような発展途上である南アフリカの教育については、見てきたように日本も注目し、支援しているところである。差別の解消を目指して新しい国づくりに取り組む南アフリカの学校において、特別支援教育の理念がどのように生かされているのかについて、実地調査をすることで、本研究をより広い視野から追究することができると考えたのが、調査の動機であり目的でもある。

ムプマランガ (Mpumalanga) 州での調査協力は、現地の JICA のボランティア隊員 (以下、JICA 隊員) に依頼し、調査が可能となった。この隊員が活動している A 中等学校 (A Secondary School) の校長とムプマランガ州教育事務所の所長に十分な説明をおこない、調査の許可を取ることができ、生徒へのアンケート調査についても JICA 隊員や学校長、教員らの理解と協力を得て実施した。

(2) 訪問調査の概要

【調査期間】2019 年 9 月 10 日～19 日

【調査の内容】フィールド調査・アンケート調査

- ・ムプマランガ州ヘイジービュー (Hazy View) 教育事務所訪問調査

[主に、特別支援教育についての教育政策や子供たちにつけたい力、成果と課題等を質問する]

- ・A 中等学校訪問調査

[主に、校長、教員、生徒らへの質問、授業観察等をおこなう]

- ・B 小学校 (B Primary School) 訪問調査

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（2）

〔主に、教員への質問、授業観察等をおこなう〕

- ・生徒アンケート調査（A 中等学校）

〔主に、障害者への態度、自尊感情、将来の目標等を英文の質問紙で問う〕

【訪問調査の方法】

- ・直接、訪問して観察する。教育事務所や校長室、教室、廊下などで質問や観察をおこなう。
- ・授業観察、質問への応答など録音、フィールドノートへの記録、デジタルカメラでの写真といったデータの収集をおこなう。

【アンケート調査】

- ・アンケートは、JICA 隊員に協力を依頼し、授業において生徒に丁寧に説明してから質問紙を配布するという方法で実施した。後日、回収した回答をメールで送付してもらいデータを入手した。
- ・アンケート調査の質問紙の具体については、巻末の資料を参照のこと。

（3）ムプマランガ州ヘイジービュー (Hazy View) 地区教育事務所訪問調査

ヘイジービュー地区の教育事務所を訪問し、教育事情について所長から話を聞いた。以下は、フィールドノートの要約である。

【教育事務所 M 所長（女性・40 代）の話】

もちろん、私たちは、special education については、非常に重要であると認識している。障害のある児童生徒のための特別支援学校もいくつも用意し、教育内容も充実させている。学びに課題のある子供の最大の問題点は、英語で学んでいる点である。学校では、7 歳までは家庭で話す言葉(home language) で授業をするが、8 歳から英語で授業をする。学校内での子供同士のコミュニケーションは home language を用いる。英語の授業は、教える教師にとっても、学ぶ生徒にとってもあまりよいことではない。授業内容を理解しにくいから。それでも、我々は、よい生徒 (learner) を育成していると思っている。質の高い医療従事者や技術者、科学者、法律家などを輩出している。リカレント教育を充実させ、児童生徒をドロップアウトさせない仕組みも作っている。生きる力については、公共の場の行為 (public conduct) が重要だと考え力を入れている。子供たちに育成したいのは、人間性、UBUNTU（註：ズールー語）、英語でいうと humanity である。マナーやモラルといったライフスキルも重視している。それは他者を respect することから始まると思う。ジェンダーやカラーやエイジに拠らず、すべて respect する。互いに信頼し合い、互いに結びつくこと (Social bond) がとても重要で、コミュニティ (community) の一員として協力していく、共に生きていくことが先生たちから学んでほしいと考えている。

M 所長は、教育省の資料や冊子を見せながら、ムプマランガ州の教育を改善したいと熱心に語った。OECD の 21 世紀型スキルや特別支援教育については南アフリカでも推進すべき課題であるし、将来的には PISA の学力調査にも参加したいと語った。国際社会で活躍する人材を輩出するため、小学校 2 年生から授業はすべて英語である。それは、M 所長が示したアパルトヘイト撤廃後の 1996 年制定

の新憲法下の基本規定（The Basic Provisions of the Constitution）の冊子にも掲載されている。人種差別や教育格差を乗り越え、すべての人々が互いを尊敬（respect）することが重要である、そのための社会的な結びつき（social bond）を非常に重視していると語った。このことが、必ずムブマランガ州の子供たちにとって明るい未来になると確信しているとも語った。

（４）Ａ 中等学校訪問調査

続いて、Ａ中等学校の訪問をおこなった。職員室棟の各部屋を案内してもらい、教職員と挨拶を交わし、校長室にて校長の学校経営の方針や教育方針について取材した。以下はフィールドノーツの要約である。

【Ｎ 校長（女性・４０代）の話】

校長として私が考える大事なことは生徒自身が何がしたいかである。この子が将来どんな職業に就きたいかをおさえ、どうすればできるかを共に考えることである。２つ目は、教師の質である。時間をかければ子供は理解できるのだから、わかるように教える必要がある。３つ目は、家庭での教育。親が生き方の手本を見せるべきだと、私は親に言っている。４つ目は、コミュニティである。学校というコミュニティに来たら友達がいる。友達や先生と学校で様々な協働体験ができる。将来、社会のコミュニティで人と一緒に、協働で生きていくために重要な要素だと私は考えている。本校では、校長の私が、朝の全校集会の場で講話をおこなっている。内容は、社会で必要なスキルやマナーである「しっかり話を聞くこと」、「しっかり勉強をすること」、「仲良くすること」などについて、いつも話すようにしている。

Ｎ校長の言葉の中にある、一人一人の子供が持てる力を発揮させる教育や社会で生きる力を身につけさせるための教育的な方略、周囲の人たちと共に生きる社会の構築などを意図した教育の理念は、まさに特別支援の理念が校長の学校経営に位置付けられているとみることができる。

その後、校舎を案内してもらいながら、授業中の教室を参観させてもらった。校長は、筆者と歩きながら話しつつも、生徒たちの様子をよく見ており、自分から生徒に話しかけに行っては筆者を紹介した。生徒たちは、とてもシャイだが明るい笑顔で、身振り手振りも加えて挨拶を返してきた。好意的な歓迎ムードで、生徒たちと交流を図った。教員とも立ち話をしたが、「校長先生は、エネルギーに生徒に声をかけ指導している」という。ある教師は、「私は生徒のために一生懸命授業をしているが、生徒がついてこない。宿題もしてこない。家庭が問題だ。」という。校長からは、教師の資質向上も重要であるという話があったが、教材や教具、教室もままならない学習環境でも、教師が教え方を工夫する余地はありそうであった。

（５）Ｂ 小学校（Ｂ Primary School）訪問調査

Ａ中等学校の近隣にあるＢ小学校も、ＪＩＣＡ 隊員が支援しており、校長に依頼し、視察することを許可された。中程度の知的障害のある５年生のＭ君と話をした。彼とは、英語での会話は難しかったが、

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（２）

身振り手振りで物を介してコミュニケーションを図ることはできた。１クラス 70 人（５年生は 3 クラスある）の一斉授業の中で、M 君は授業内容がわからないまま座っていた。非常に忍耐強い児童である。休み時間に友達と遊ぶときと給食が一番の楽しみである。担任の K 先生（女性・40 代）には、同じような障害のある息子がいるとのことであった。M 君への指導方法について、JICA 隊員から特別支援教育の指導方法を意欲的に学び、児童が、より理解できる授業がしたいと積極的に授業改善を試みていた。子供たちは、人数が多く、担当教員は把握しきれていないようであるが、もめごともなく、楽しそうに遊んだり学んだりしている。いじめや障害への差別的な言動は皆無とのことである。

M 君に特別なプログラムがあるとか、教師が一人つくとかいうことはない。インクルーシブ教育かといえば、形式上はインクルーシブである。

一方で、子供たちの中には理解が早く優秀な子供も数名いるとのことであった。そういう子供は、大学やその先の職業に向けて、その子供に合った教育を受けられるという。ムプマランガ州の学校の校長たちは、このような学校から輩出された優秀な人材である。小学校においては、様々な能力を持つ子供たちが、混然一体となって教室にいるという様子であった。そのような中で、K 先生は、子供一人一人に着目しようと意識していることが見てとれた。

（６）A 中等学校の生徒へのアンケート調査より

学校訪問での取材や観察だけでは見えてこない面もアンケート調査で探りたいと考えた。生徒たちが考える生活意識の中にある特別支援教育や生きる力に関わる意識を調査することが目的である。調査は、以下のようにおこなった。

【質問項目】アンケート調査の項目は、国立青少年教育振興機構（2015）「高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」の調査（以下、日米中韓調査）項目を参考に作成した⁽³⁾。この調査から、生き方に関わる内容を含む項目を抜粋した。抜粋した質問内容は、以下の通りである（表 2）。英文による質問紙を配布して実施した。【巻末の資料を参照】

表 2 生徒アンケート調査の質問項目

Q1	性別
Q2	学年
Q3	社会的なふるまい：美化・調和・思いやり
Q4	自分自身に関する意識：努力・勤勉・挑戦・規範意識・将来
Q5	友達に関する意識：個性・正義感・誠実・正直・責任感・勇気
Q6	生き方への意識：地位・お金・家庭・好きなこと・ストレス・社会貢献
Q7	国や社会への意識：偏見・勤勉・国を愛する・国への貢献・国への寄与

国立青少年教育振興機構(2015)「高校生の生活と意識に関する調査報告書(日米中韓調査)」の質問項目より抜粋

【調査日】2019年9月10日～19日

【調査対象者】対象者（A 中等学校の生徒：中学2年から高校3年）の属性と人数は以下のとおり（表3）である。有効でない回答及び未提出は0で、当日出席していた生徒全員から回答を得た。

表3 調査対象者の属性と人数

	中学2	中学3	高校1	高校2	高校3	合計
School Grade	G8	G9	G10	G11	G12	
男子	30	15	18	7	7	77
女子	31	24	17	10	19	101
合計	61	39	35	17	26	178

質問紙の質問項目は、公共的なふるまい、自立や自律に関連する意識、人生の目標、社会や国に対する考え等で、英語で問うた。質問数は35で、回答は、1.「Strongly agree」、2.「Somewhat agree」、3.「Somewhat disagree」、4.「Disagree」の4件法でおこなった。回答にかかる時間は15分ほどである。

【調査方法】JICA 隊員が、8年生（G8）～12年生（G12）のすべての授業で質問紙を配布し回収。回収したデータをメールで筆者に送付。

【調査結果】この調査のうち、特別支援教育の理念や生き方に関する質問項目に関連する主な4つの質問項目の結果を取り上げる（表4～7）。

表4 障害のある人や老人を手助けする

Helping handicapped people or the elderly.

	Often	Sometimes	Seldom	Never
G8	26	24	11	0
G9	16	22	1	0
G10	16	15	4	0
G11	9	7	1	0
G12	14	8	4	0
Total	81 (45.5)	76 (42.7)	21 (11.8)	0

表5 今そんなに勉強しなくても将来問題ない

It won't be a problem in the future even though I don't study much now.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
G8	10	10	6	35
G9	9	5	6	19
G10	3	2	4	26
G11	3	1	2	11
G12	6	2	0	18
	31 (17.5)	20 (11.2)	18 (10.1)	109 (61.2)

表6 変えるより今を受け入れるほうがいい

It is better to accept my current situation rather than try change it.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
G8	24	16	6	15
G9	18	10	6	5
G10	10	7	3	15
G11	8	3	2	4
G12	14	3	2	7
	74 (41.6)	39 (21.9)	19 (10.7)	46 (25.8)

表7 将来について明確なゴールがある

I have clear goals for my future.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
G8	46	7	2	6
G9	30	5	3	1
G10	31	3	0	1
G11	15	2	0	0
G12	25	1	0	0
	147 (82.6)	18 (10.1)	5 (2.8)	8 (4.5)

【結果分析と考察】上記の主な4つの質問項目と、ここに表としてあげなかった質問項目（その他の質問項目）も含めた分析と考察をまとめておく（表8）。

表 8 主な4つの質問項目とその他の質問項目についての分析と考察

	質 問 項 目	分 析 と 考 察
表4	障害のある人や老人を手助けする	G9（9年生）以上は、肯定的な回答が100%に近い。気づいたら手を差しのべるという行為が実際よく見られた。ただし、気にならなかったり、必要でないと判断できる場合は、手助けはしないという自然体であった。行政による公的な援助が十分でなく、共助で解決していくコミュニティのあり方が、親を見て育っている生徒たちにも育っているのではないかと考える。
表5	今そんなに勉強しなくても将来問題ない	「そうは思わない」という否定的な回答が全体では71.3%であった。生徒たちは、将来について安穩としているように見えるが、勉強をして将来の生きる力につなげたいという思いをどの学年でも、特に最高学年のG12（12年生）は強く持っていることがわかった。半面、「勉強しなくていい」とする回答も、各学年で2～4割あった。将来というものについて、夢を持てていない生徒もいるのではないだろうか。個別に生徒の話をよく聞けば、様々な課題も把握できるだろうが、1つの学級に40～70人いて、長椅子に2～3人ずつ腰掛け、ノートに板書を写している様子からは、一人一人の生徒への手厚い進路指導は難しいと考える。
表6	変えるより今を受け入れるほうがいい	肯定的な回答をした生徒は63.5%であった。強く否定する回答が4分の1あった。アパルトヘイト撤廃と同時に1974年マンデラ（Nelson Mandela）大統領が誕生し、新憲法のもと教育施策にも力を入れてきた南アフリカであるが、まだまだ施設、教員の人数や質、予算、就職や進路等で黒人生徒と白人その他の生徒とは格差がある。教育や就職に格差のある現状を生徒たちはわかっている。一方で、マンデラ大統領は彼らの英雄である。その影響をより受け、夢を持ち、挑戦しようとする気概を持たせられれば、より生きる力が育っていくのではないかと考える。
表7	将来について明確なゴールがある	肯定的な回答が92.7%であった。G8（8年生）の生徒の1割ほどが「まだない」としているが、G9（9年生）以上の生徒は、ほぼ明確なゴールを持っていると回答した。校長や教員の話では、親に「仕事がない」状態とのこと。多くがスーパーの駐車場でのカート集め、路上での木彫りの人形売りなどをしているとのこと。「大学進学や企業の社員、商店の警備員などはなかなか就けない仕事である」という。このような社会の状況を考えると、将来に就きたい仕事があるかと問われて、「就きたい仕事」よりも「就ける仕事」として回答した結果、92.7%（肯定的回答）になったのではないかと考える。
表の掲載はない	その他の質問「地位やお金、家族、ストレスのない生き方、社会貢献、友情、他者から認められること、幸福などの価値」について	地位やお金、家族、ストレスのない生き方、社会貢献、友情、他者から認められること、幸福などの価値について問うたところ、生徒たちの回答は、肯定的（とてもそう思う、そう思う）な割合が大きかった。高い地位やお金を求める問いも肯定的に選択するが、ストレスのない暮らし、家族や家庭に幸せを求めている生徒が多いと考える。

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（2）

A 中等学校の生徒は、日本の高校生と比較すると全ての項目で肯定的回答の割合が高い（日米中韓調査の結果と比較）。生徒たちは、仕事やお金は欲しいが、今は幸せであるし、コミュニティのつながりを非常に大事にしているという状況が確認できた。社会に貢献したい、国に役立ちたい、努力すれば結果がでるなどで肯定的な回答が非常に高く、自尊感情が高いことがわかる。

このような結果は、教室や教具、教材もままならない格差のある教育環境であっても、子供の将来の職や向いていることを考え、将来について指導する教員らの思いがあるからこそである。コミュニティの中で生きる力を育成していく、特別支援教育の理念を基盤とした取り組みが反映されているのではないかと考える。

（7）考察

A 中等学校の教育支援にあたる JICA 隊員の話では、教育環境は整っているとはいえないが、生徒に悲観的な言動は見られない、将来への不安についての言動が出るのも聞いたことがないとのことであった。ズールー族（Zulu）由来のコミュニティ（部族共同体）の団結意識が強く、教育行政側も校長もコミュニティのなかで生きていく力を育成することを重要視していた。例えば、「挨拶」は、わが国では、コミュニケーションとしてとらえているが、部族ごとのコミュニティが強固な南アフリカでは、「挨拶」は、「敵ではない」ということを示す重要なふるまいで、疎かにすると襲撃されるという昔の慣習からきているとのことであった。コミュニティに属していれば、一生安心して暮らせるという一面があり、安穩としてしまいがちで、今ある自分をそれ以上に高めていこうというモチベーションにつながりにくいと考えられる。しかし、調査結果からは、生徒たちは、今の自分に満足していることが明らかになった。自尊感情も高い。この調査で、コミュニティという共生社会を築く一員として、子供たちに生きていく力が育っている様子が確認できた。

世界各国に文化や宗教、経済格差などの背景があるが、そのような中でも、子供を取り巻く社会的な環境の状況を重視しながら、特別支援教育の理念^{（4）}を独自の方法で遂行し、子供たちに生きる力を育成しようと教育関係者は考えているということを、南アフリカのムプマランガ州の教育から多面的に捉えることができた。

4 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校を創る要件

（1）特別支援教育に信念を持ちリーダーシップを発揮する校長

A 中等学校の事例から、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校の要件として確認できたものは、まず、第一に、校長のリーダーシップであった。そのリーダーシップは、支援ニーズのある子供を根幹に置き、支援ニーズのある子供やすべての子供が安心して過ごせることを最重要課題にして特別支援教育を基盤とした信念が学校経営に発揮されていた。

学校経営研究を臨床的アプローチからおこなう曾余田（2003）は、学校経営で一番土台となるのは、校長の明確なビジョンであり、加えて、臨機応変な判断、教職員と保護者、地域の人々など学校を取り巻く人たちとの連携が重要としている。

南アフリカの A 中等学校では、校長は、ビジョンの根幹に特別支援教育の理念を明確に置き、社会を生きていく力を育成しようとしていたことが確認できた。

（２）授業改善を研鑽する教員

第二の要件は、教員の授業改善に向けた研鑽である。どの教員も不十分な教育設備の中、授業改善をおこないたいと考えていた。一人一人の子供の学びを尊重し、多様な学びの場を提供できるようにしたいと国際支援も受けながら取り組んできた。自尊感情の高いこの地域の子供たちに、まずは、将来についての目標を持たせ、一人一人の教員が授業改善の研鑽に取り組むようになれば、子供が自身の持つ力を発揮できるようになる可能性が大いにあるのではないかと考える。

（３）自尊感情を高める子供

第三の要件は、子供の自尊感情の育成である。アンケート調査で、A 中等学校の生徒たちは、自尊感情が高いことが明らかとなった。一人一人の子供にこうありたいという未来の自分の姿を描かせ、自分らしく、希望をもって社会に出ていける自尊感情を高めていくことが重要である。子供が学校教育を終えてからも生きていくための力を育成するため、子供の得意なことや好きなことが周囲から称賛される機会を多く持たせ、さらなる興味関心を引き出し、探究心を育てることができれば、自身の持てる力を発揮し、設定した目標や夢を達成する、より生きる力を身に着けた子供が育っていくと考える。

（４）学校や子供を支える家庭や地域

第四の要件は、学校や子供を支える家庭や地域である。A 中等学校では、社会で排除されないようなふるまいについて、生徒たちは厳格に指導されていた。社会で生きていくために、わが国でももちろん重要なことであるが、zulu 族というコミュニティに属するというより強固なつながりがあり、このことが相互扶助や部族内で共生する社会へとつながっていた。どの子供にも、生きていくための支援がコミュニティに属していれば受けられる。このような社会とのつながりという要件は、わが国でも再度検討していくべき要件であると考ええる。A 中等学校でのつながりを見てきた結果、わが国での学校と地域社会とのつながりは、希薄であると捉えられる。

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校を創る要件について、南アフリカの調査で確認できた結果を、次の図 5 のように表した。

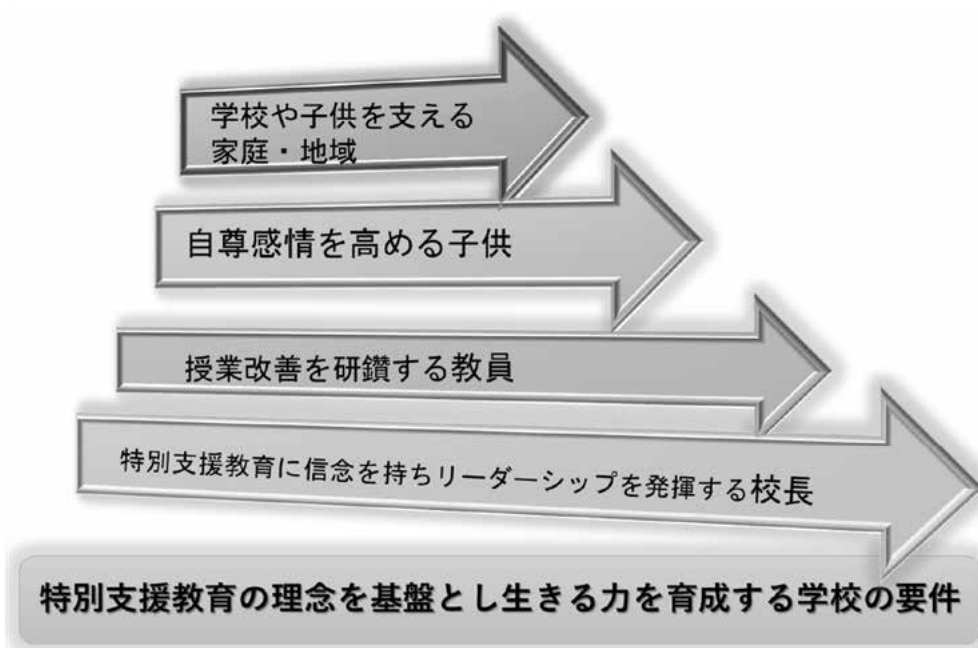


図5 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校の要件

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校を創る要件として、リーダーシップを発揮する校長を土台に、教員、子供、家庭・地域の4つが見出された。それぞれが、一人一人の子供が自分らしく可能性を発揮しながら生きていく力を育成し、支援をつないで地域に理解されて自立して生きていけるよう働きかけながら進んでいく（矢印）という要件が求められることが確認できた。

5 成果と課題

南アフリカのA中等学校は、わが国に比べて、一人一人の子供の教育的ニーズへの対応や教材や教具の数や質、設備、授業の工夫など十分ではなかった。そのような事情の中でも、校長や教育事務所は、特別支援教育の理念を基盤とした教育が重要であると考えていた。生徒アンケート調査では、子供たちが、現状も未来についても豊かな気持ちをもって生きていることが明らかになった。自尊感情も日本の生徒よりかなり高かった⁽⁵⁾。その要因は、困った時に家庭を丸ごと助けてくれることが保障されているような地域コミュニティがあり、その中心に学校があるという社会的な環境の存在が大きいと分析できた。このことは、特別支援教育の理念が学校を含む地域コミュニティ全体に根付いているからだと考える。OECDの学力テストは下位であるが、若者人口が多い南アフリカは、子供たちのエネルギーに満ちており、これからの社会を生きる力の育成について注目し続けるべき事例であると考ええる。

本研究の成果は、子供を取り巻く社会的な環境が厳しい南アフリカでも、特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校を創っていく大きな要素として、校長のリーダーシップと教員の研鑽

が学校の改善につながっていくと確認できたことである。子供を取り巻く社会的な環境は、まずは、学校や学級である。教員が子供を理解し、家庭や地域が子供を理解し、子供たちが子供たちを理解するという環境づくりが、教育的ニーズのある子供への最大の支援体制となる。そして、卒業後においても子供を取り巻く社会的な環境は、子供が将来にわたって生きていく力を育む支えになる。持続可能な共生社会の実現をめざすことの意義がここにあることも確認できた。

本研究では、これからの社会を生きていくために求められる力にも着目し、実際に学校が多くの課題を抱え、その状況下でどのように具体化できるのかという学校のあり方についてある程度明らかにできた。このことは、校長や教員でおこなう学校経営研究や研究者が校長や教員からの聞き取り調査でおこなうような既存の臨床研究を一步進めることができた成果だと考える。

課題としては、多様な子供たち一人一人の個性と背景を鑑みながら生きる力を育成するということは、根本的には、学校が真にあるべき姿であるにもかかわらず、実践していくことは難しいことがあげられる。校長のリーダーシップ不足であったり、教員の専門性の未熟さであったり、家庭の状況が学校だけではどうしようもないといったことが現場では多々あるからである。

しかし、学校は、困難な課題山積の現実には埋没せず、21 世紀の未来に希望も持ちながら、どの子供も生きていける持続可能な共生社会をめざす行動を起こす力を育成するものである。すぐそこに迫っている 10 年後の 2030 年の社会を生き抜く力を育成する学校のあり方として、どのような力を育成する必要があるのかという枠組みについてさえ、研究途上であり、本研究の限界でもある。しかし、このことについて、近年、21 世紀型スキルの研究においてかなり進展があったことを付け加えておく。

OECD は、2015 年から進めてきた OECD Future of Education and Skills 2030 プロジェクト（以下、Education2030 プロジェクト）で、急速な社会的変化に伴う未来の教育を描き、求められるコンピテンシーを OECD ラーニング・コンパス 2030 という名称で 2019 年 5 月にレポートを公表した（OECD, 2019）。

ラーニング・コンパス（学びの羅針盤: learning compass）という比喻は、生徒（Student agency: エージェンシー）が教師の決まりきった指導や指示をそのまま受け入れるのではなく、未知なる環境の中を自力で歩みを進め、意味のある、また責任意識を伴う方法で、進むべき方向を見出す必要性を強調している。ここでのコンピテンシーは、本論文中の 21 世紀型コンピテンシーとは、また枠組みが変異し、知識、スキル、態度及び価値観を含み、2030 年を生き抜いていくために必要と考えられるものである。このように、子供に求められる生きる力は、変化していく。

しかし、だからこそ、教育の不易となる根幹を揺るがさずに取り組んでいくことが重要である。学校が中心となって、地域、家庭と連携すること、若手教員を育成することは、もちろん求められ続けるだろう。特別支援教育の理念を基盤とするということにおいては変わらないが、社会的ニーズや、環境が様々に変化する。そのような変化にどのように対応していくかは、常に研究していくことが必要になる。

それに伴い、学校でどう育成していくのかを組織の改善も含めて、学校のあり方を提案できる臨床研究を追究し続けたいと考える。

【註】

- （1）学校現場の実践的な研究は、例えば、『LD 研究』（日本 LD 学会誌）や、日本 LD 学会大会等で多くその成果が発表されている。
- （2）共生社会は、特別支援教育について審議された「特別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」（中央教育審議会,2005）の中で、障害の有無にかかわらず、誰もが相互に人格と個性を尊重し支え合う共生社会を特別支援教育の理念が目指すものとし、その実現のため、学校教育においては、重要な役割を果たすことが求められていると示された。
- （3）「高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国の比較—」とは、国立青少年教育振興機構が2014年9月～11月にかけて日本（有効回答数1850）、米国（同1560人）、中国（同2518人）、韓国（同2833人）の4か国の高校生に実施した国際比較調査の結果を取りまとめた報告書（2015年8月）。青少年教育研究センター長明石要一は、この4か国の高校生の比較調査について、日本の高校生が4か国で一番自尊感情が低く、将来に不安を感じているとしている。自信が持てず、将来の人生の目標がはっきりしていないからだとしている。体験活動を多く持つ高校生は、正義感や思いやり、自立意識、自尊感情が高まるというデータを得て、体験や外に向かう経験を積ませることを提案している。
- （4）特別支援教育の理念は、障害のある子供を根幹に置き、すべての子供（支援ニーズや教育的に弱い立場の子供を含む）が、持てる能力や個性を伸ばし、子供をとりまく環境が子供を理解し支援するよう働きかけながら子供の困難が将来にわたって軽減される中でよりよく生きていけるよう、指導を積み重ね、自己肯定感を醸成し、主体的に自分らしく生きていく意欲を育むという考え方と筆者は捉えている（谷山, 2022）。
- （5）日米中韓調査（2015）で、「貧しいと夢はかなわない」の質問に対し、「そう思わない」、「思わない」の否定的回答が、日本（58.7%）、米国（48.2%）、中国（43.9%）、韓国（91.5%）であるのに対し、南アフリカのA中等学校の生徒は10.1%であったことから、日本とは48.8ポイントの差がある。また、「努力すれば結果が出る」の質問に対し、「とてもそう思う」、「ややそう思う」の肯定的回答が、日本（68.8%）、米国（86.1%）、中国（61.6%）、韓国（85.5%）であるのに対し、南アフリカのA中等学校の生徒は95.7%であったことから、日本とは27.6ポイントの差がある。

あとがき

本調査、研究に多大な協力をいただいた皆様、生徒の皆さんに深く感謝します。本調査の後、南アフリカ共和国では新型コロナウイルス感染症（COVID-19）で多くの死者が出た。JICA 隊員も活動を中断し日本へ一時帰国の命令が出た。A 中等学校に関わる教員、生徒の身近な人々も多く亡くなったと知らされた。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

引用文献

浅野信彦・伊藤友美（2009）. 小学校におけるキャリア教育の現状と課題—実践からの示唆— 文教大

学教育学部紀要, 43, 13-23.

中央教育審議会 (2003). 初等中等教育における当面の教育課程及び指導の充実・改善方策について (答申) <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/f_03100701.htm> (2022 年 1 月 8 日)

Gardner H. (1983). *Frames of mind: The theory of multiple intelligences*. Basic Books.

服部勝憲 (2002). 南アフリカ共和国中等数学科教員現職教育の課題—ムプマランガ州におけるベ－スライン調査から— 国際教育協力論集 (広島大学教育開発国際協力研究センター), 5 (1), 109-123.

井ノ口一善 (2008). 南アフリカの義務教育改革—成果と課題— アフリカレポート (日本貿易振興機構アジア経済研究所), 47, 37-42.

石井英真 (2015). 教育実践の理論から「エビデンスに基づく教育」を問い直す—教育の標準化・市場化の中で— 教育学研究, 82 (2), 30-42.

石井英真 (2017). 資質・能力ベースのカリキュラム改革をめぐる理論的諸問題 国立教育政策研究所紀要, 146, 109-111.

国立教育政策研究所 (2016). 資質・能力 [理論編] 東洋館出版社

国立教育政策研究所 (2009). キー・コンピテンシーの生涯学習政策指標としての活用可能性に関する調査研究 (研究成果報告書) <https://www.nier.go.jp/04_kenkyu_annai/div03-shogai-lnk1.html> (2021 年 1 月 8 日)

国立青少年教育振興機構 (2015). 高校生の生活と意識に関する調査報告書—日本・米国・中国・韓国と比較— <https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/> (2022 年 8 月 28 日)

黒田友紀 (2016). 21 世紀型学力・コンピテンシーの開発と育成をめぐる問題 学校教育研究, 8-22.

松尾知明 (2015). 21 世紀型スキルとは何か: コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較 明石書店

グリフィン、P・B. マクゴー & E. ケア編 三宅なほみ監訳 益川弘如編訳 望月俊男編訳 (2014). 21 世紀型スキル—学びと評価の新たなカタチ 北大路書房

文部科学省 (2018). 発達障害のある子供たちのための ICT 活用ハンドブック https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afildfile/2018/08/09/tsujo_tsukuba.pdf (2022 年 3 月 31 日)

文部科学省 (2019). 新学習指導要領について <https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm> (2022 年 10 月 26 日)

文部省 (1996). 21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について—子供に「生きる力」と「ゆとり」を— 中央教育審議会第一次答申 中央教育審議会 <http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm> (2022 年 10 月 26 日)

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（2）

- 諸富祥彦（2000）. エンカウンターこんな時どうする！—ヒントいっぱいの実践記録集 図書文化
- 村田翼夫（1998）. 南アフリカ共和国における教育の現状と教育協力・援助の必要性 国際教育協力論集（広島大学教育開発国際協力研究センター）,1（1）, 111-124.
- 長山芳子・勝二博亮（2018）. 通常の学級と特別支援学級の相互的アプローチによる ADHD 児への対人関係支援—受容的な学級雰囲気づくりと 特定の子どもの関係づくりを通して— LD 研究 , 27（4）, 466-477.
- 西野真由美（2017）. 人格教育と資質・能力 国立教育政策研究所紀要 ,146, 23-36.
- OECD（2019）. OECD Learning Compass Concept Notes
<https://www.oecd.org/education/2030-project/teaching-and-learning/learning/learning-compass-2030/OECD_LEARNING_COMPASS_2030_Concept_note_Japanese.pdf>（January 8, 2022）
- 佐々木正美（2008）. 自閉症児のための TEACCH ハンドブック 学研プラス
- 白井俊（2020）. OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来 ミネルヴァ書房
- 曾余田浩史（2003）. 学校経営研究における「臨床的アプローチ」について 日本教育経営学会紀要, 45, 176-182.
- 菅原秀幸（2002）. グローバル知識経済へのシフト—グローバル知識経済のメカニズムと知識の集積モデル— <<http://www.sugawaraonline.com/paper/GlobalKnowledgeEconomy.pdf>>（2022 年 1 月 8 日）
- 竹田契一（2015）. 当事者から学ぶ学習のつまずき LD 研究, 24（1）. 88-96.
- 田中昌弥（2012）. OECD の教育政策提言における evidence-based 志向の問題性 日本の科学者（日本の科学者会議会）, 47（10）, 584-589.
- 谷山優子（2020）. 教員が考える子供たちに育成したい資質・能力：教員アンケート調査の分析から 武庫川女子大学大学院臨床教育学研究科紀要, 26, 17-32.
- 谷山優子（2022）. 特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（1） 教育諸学研究（神戸女子大学文学部教育学科紀要）, 35, 37-50.
- 山本昇一（2010）. 南アフリカ共和国の教育事情及び生活習慣・文化 在外教育施設指導実践記録（東京学芸大学国際教育センター）, 36, 115-119.

資料「南アフリカ生徒生活意識調査質問票（英文）」

Survey on Secondary school students' "Views on Life and Moral"

Instruction for answering the survey

1 All answers are completely anonymous. **Do not sign your name on this questionnaire.**

2 Please answer every question by yourself.

3 There is no correct or incorrect answer to any question.

Just **CHECK(✓) THE ANSWER** that best describes your opinion or situation.

Thank you very much in advance for your participation.



Q1 Your gender? 1. Male 2. Female

Q2 Your grade? 1. G8 2. G9 3. G10 4. G11 5. G12

Q3 How often have you done the following activities in the past year? Please check only **ONE** that applies.

	Often	Sometimes	Seldom or Never
a. Picking up trash at school or cleaning up my class.	1	2	3
b. Stopping bullies or arbitrating a quarrel.	1	2	3
c. Helping handicapped people or the elderly.	1	2	3
d. Helping with housework.	1	2	3
e. Taking care of animals or plants.	1	2	3
f. Being grateful to parents or friends.	1	2	3

Q4 The following questions are about yourself. Please check only **ONE** for each question.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
a. I have many friends.	1	2	3	4
b. I am as capable as others.	1	2	3	4
c. It won't be a problem in the future even though I don't study much now.	1	2	3	4
d. It is better to accept my current situation rather than try to change it.	1	2	3	4
e. I tend to obey rules and regulations.	1	2	3	4
f. I have clear goals for my future.	1	2	3	4
g. I think my dreams will come true someday.	1	2	3	4
h. Nature has mysterious power.	1	2	3	4

Q5 What characteristics do you look for in friend(s)? Please check **ONE** on each line.

	Very important	Somewhat important	Not so important	Not important at all
a. Having individuality	1	2	3	4
b. Having a strong sense of justice.	1	2	3	4
c. Keeping promises.	1	2	3	4
d. Being Brave.	1	2	3	4
e. Being thoughtful.	1	2	3	4
f. Being kindness.	1	2	3	4

特別支援教育の理念を基盤とし生きる力を育成する学校（2）

- Q6** The following statements are life goals that people often have. What are your life goals?
Please check only **ONE** that is closest to your thoughts on each line.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
a. To be of high social standing.	1	2	3	4
b. To be financially wealthy.	1	2	3	4
c. To build a happy family.	1	2	3	4
d. To make a living doing what I love.	1	2	3	4
e. To have a laid-back, stress free life.	1	2	3	4
f. To be useful to society.	1	2	3	4
g. To have many friends.	1	2	3	4
h. To be recognized by others.	1	2	3	4
i. To feel happiness.	1	2	3	4

- Q7** What do you think of the following statements? Please check only **ONE** on each line.

	Strongly agree	Somewhat agree	Somewhat disagree	Disagree
a. Our society is helping each other.	1	2	3	4
b. If we are poor, our dream will not come true.	1	2	3	4
c. We will be rewarded if we make our effort.	1	2	3	4
d. I am proud of my country.	1	2	3	4
e. I want to work for my country.	1	2	3	4
f. It is important to contribute to my country.	1	2	3	4

Thank you very much for your cooperation!



※国立青少年教育振興機構（2015）.「高校生の生活と意識に関する調査報告書」75-80.を筆者改変
<https://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/98/>